

■ 随 筆 ■

昭和っ子のビール

本 多 久 吉

この正月、成年式を迎えたばかりの青年を工場見学に案内したところ、驚いたことに集まった男女の割合が6:4であった。男子の方は時間の都合もあってかほとんど学生であったが、女子の方は勤め人が多く、服装もそれぞれ好みにあった、いかにもなりたての成年ではないといった落ち着きがあった。私は10人ばかりが1団になっているテーブルについて、雑談の仲間入りをした。ただ同じ年に成年式を迎えただけのつながりで、出身校も違い、初めての顔合せらしい。このテーブルには女子が

人もいた。面長で毛皮の衿をつけた女はこのテーブルで酒をのめる方らしく、ビールを注ぐと素直にのみほしていた。デンマーク風の乾杯のし方はこんな風にするものですと、私は面長の女をみつめながら杯をもち上げ「スコール」といった。彼女は一気に呑みほすほどのまなかたが私がまえもって話をしておいた通り、のみおわると、杯を私の方にほんの心持ち傾けて、のみほしたまねごとをし、教はったとおりに、ちよっと会釈をして静かに杯をおいた。腫のきれいな女の子だった。私の隣にいた大学生がデンマーク風の乾杯って素敵ですねと私達の乾杯にみとれていた。「皆さんやりましょう」彼と彼女でもよい、彼と彼でもよい。「スコール」と杯をもち上げたら、傍らの人達もこれに和するのがエチケットだとすすめると、ようやく、誰かれなしに「スコール」「スコール」の連発となり、このテーブルは急に賑かになった。すっかりうちとけた雰囲気になったところで、私は酒のみ方について話を始めた。

皆さん、ここにちょっとしたデーターがあります。「酔いどれ天国」といわれる日本人は1体どの位のむでしよう。その国でのまれるすべての酒類を100%アルコールに換算し、その全容量を総人口で割った数字ですがソ連や東欧を除く西方10ヶ国の中、日本はどんけつで首位のフランスの $\frac{1}{3}$ 、アメリカやイギリスの $\frac{1}{2}$ 、つまり日本が「酔いどれ天国」の悪名をきるのは、酒のみのエチケットをわきまえぬ、呑ん平が片よっているからであろう。未成年者にも水がわりにワインを飲ませているラテン系の国々は別として、幅ひろく、酒をたのしんでいる国のことが羨しく思われる。たとえばいまいった、デンマークでは、馬鹿騒ぎをしている酒場がみあたらない。が一方婦人同伴の食卓でも「スコール」「スコール」と誰1人

仲間はずれがいなくわき目にも楽しそうである。あまりのめない人は「スコール」と杯を献け、ちよっと口をつけただけで、いかにもおいしかったと愛嬌たっぷりの会釈をする。こんな上品なのみ方をするデンマークが日本より少し多く第9位。

「それでは日本人はまだ飲んでもよいのですか」と正直そうな学生がぼそっと言った。この学生は期末試験で3課目残り、昨夜は徹夜したそうだ。私は日本に大酒のみといわれる人が20万位いると推定する。この人達が今の倍ほど飲んでも知れたもの、それより、組織労働者が男子毎晩ハイボール1杯、女子はポートワインをグラス1杯のんで貰っただけでサントリーの工場（現在洋酒だけ5工場ある）が1ぺんに20に増えても足りぬ話したら、彼らは驚いていた。茶日な男の子がいて「ビールの話をしているときですからビールに換算したらどうなるのですか」とやりかえして来た。ハイボール1杯に相当するアルコール分ならビール1本。まさか日本の組織労働者が毎日大ビン1本のビールが飲めるだろうか。これはアルコールの容量の問題ではなく、経済の問題である。私はここで彼や彼女らに酒税の話をせぬわけにはいかなかった。「スコール」「スコール」の連発で私もいささかメートルが上りかかっていた。小売値1本115円の大ビンを片手に、こんへんのところまで税金ですよと胸の半分より少し高い目のところを指差した。

1本でこんなとは何と高い税金ではないか。淑女も紳士もあきれかえた。「まさに世界一高い酒税だよ。昔だったら、この酒税で帝国海軍、八八艦隊って知ってるかい。それを呑え平が養っていたんだ」とつい地金が出てしまった。徹夜の学生がぼそぼそつぶやいた。「あなたは明治っ子ですね」彼らは私をはじめ大正っ子とふんではいたらしい。明治の話が出たので、私は明治っ子は〇〇〇、大正っ子は△△△△、昭和っ子はサントリーだよと本番の話がいまごろやっと話題に上った。私は少しづつはづんで来た。「その意味はだ、このビールをつくった私はいかにも明治っ子だが、このビールのよさがわかって貰える人は大体昭和っ子ということだよ」と、このビールのよさを説明する。

「CLEAN AND MILD 私には、わかるような気がしますわ」と私の話にあいづちうったのは丸顔のトイメ

に坐っている彼女だった。世評にこのキャッチ、フレーズは女性向きだといわれるだけあって女性の理解は早い。しかし、口あたりがよいのでアルコール分が少いようにいわれますが、さにあらず、ほかのビールより幾分多いという段になると、「そうかしら」といった顔付をする。そういえば彼女は「スコール」やってもあまり飲んでいなかった。その隣の例の面長の彼女は「口あたりがよいのですこしすごしたの、眼のふちが少し赤くなっている」とたずねた。

よそのビールより少し醸酵度が高く、それ故にさっぱりしているが、たっぷり後熟期間（ラガー）をおいているので、ふくよかな味がする。こんな説明をすると明治っ子や大正っ子には若干の抵抗がある。こんな話の折にきまって「コク」という通ごのみの言葉が飛び出す。清酒屋さんがよく使うこの術語(?)が商売用語が議論される。こんな議論をする昭和っ子には1週間、せめて3日間でもつづけさまにこのビールをのんで載くしかない。

さらにこのビールの香りのよさに至っては素直にそれをうけあって載くほかない。この点でも、これまでのビールに馴染んでいない若い人達は有難い。すくなくとも、外国の人達が漬物くさいとか、しょうゆのもろみ臭がするという、これまでのビールにある、あの香が本当のビールの香りだとし、それと違った、ホップと酵母のかもしれない香りを、薬草臭いなどと酷評はしない。

コップを斜めに、泡のたたぬようにビールを注ぐのは間違いで、コップを堅にし、少し高い目のところから注ぎ初め、泡がコップの上 $\frac{1}{2}$ ぐらいを占めるようになれば、泡がもり上り日に静かに注ぐのがコップですと、その美事な泡、ごく小粒の真珠を幾万、幾十万とつめこんだような純白でこまやかな泡を背に、緑色の「向い獅子」のサントリーのマークがうき出したようにみえるコップを手にして若い人達は私の説明を合点してくれた。また、青みがかった、琥珀色のすきとうったビールの色は文句なしにほめてくれた。私が昭和っ子にはこのビールのよさが判るといったのは正しい。

それにつけても思いだされるのは、1つは銀座の有名なピフテキの店、もう1つは同じく銀座裏のとある古い、知る人ぞ知るといったバーの話。

サントリービールが発売された当時、逸早く、この店には見本が届けられ、セールスマンも、足繁く週たがご主人はけんもほろほろで、係員も手を挙げていた。その後半年以上もたった、ある日、ご主人の古いお友達のとりにしで、セールスマンでない私がこのビールについてお話をする機会を得た。予ねてからうかがっていた通り、一代であのような店を築き上げ、国の内外にその名声をほしいままにしておられるご仁だけに、人格識見、

ただただ敬服するばかりだが、あけすけに批判される、その辛辣さには、はとほど降参した。私の説得が効を奏したとは、つゆ思わないが、ちようどのみごろの温度になるように計算して持って行った見本が多分そうさせたのだろうか。ご主人の気持もいつの間にか変わってともかく取扱ってみようと考慮を約束された。そのとき私はご主人に、この店に来られるお客様が、ご婦人同伴の場合、青年達のグループ、来日して日も浅い外人である場合その方々だけにまずこのビールをおすすめ下さるようになつたのんだ。この店で取扱っておられるこれまでのビールの愛飲者はさしづめ、相手にして載かなくとも止むを得まいと思った。それから3~4ヶ月たった。ご主人からわざわざ呼び出しがかり、故ケネディ大統領の追悼式が日本であった際、来日した米陸軍儀仗兵の1団がこの店に来、サントリー、ビールで賑った話やら、どの現場でも出るようになったこと、ご主人や副社長さんもいつのまにかこのビールの愛好者になってしまつと話された。

もう1つの話は、中年以上の、いうなれば明治っ子と大正っ子が常連であるこのバーはホステス達もどちらかといえば30前後のやや年増が多い。一現の客を入れぬ、なんとなく古風、いまだきこんなバーがあるのかといった感じの店、この店では、ビールはビンごと出さず、バーテンは器用な手つきで開栓し、台のついピルスナー型のコップに注いで出す習慣。そこで私はママさんにたのんで、サントリービールだけを使って貰った。その結果、ときに〇〇〇にしてくれと所望される客もあるには、あるが大多数の方はだまって召し上っていることが判った。ママさんもホステス達も、通ぶってなんのかのとお客はいわれるがそれはレットルをみてのことですと、しみじみと私に述懐するのであった。

こんな話を私は彼と彼女らにつけくわえて話すことを忘れなかった。さいごに彼と彼女の1団はそれぞれのコップになみなみとビールを泡だて、私と私の会社の発展のために、にわか仕込みだが、要領よく「スコール」をやって別れた。

(サントリー-KK 常務取締役)